京都旅行のしおり

実施日　平成 30 年 5 月 15 日から 16 日
見学地　京都市内
目的　　日本歴史の断片理解
集合　　名古屋駅中央コンコース銀の時計下　午前７時
訪問先

葵祭

葵祭（あおいまつり、正式には賀茂祭）は、京都市の賀茂御祖神社（下鴨神社）と賀茂別雷神社（上賀茂神社）で、5 月 15 日（陰暦四月の中の酉の日）に行なわれる例祭。石清水八幡宮の南祭に対し北祭ともいう。平安時代、「祭」といえば賀茂祭のことをさした。
石清水祭、春日祭と共に三勅祭の一つであり、庶民の祭りである祇園祭に対して、賀茂氏と朝廷の行事として行っていたのを貴族たちが見物に訪れる、貴族の祭となった。京都市の観光資源としては、京都三大祭りの一つ。
平安時代以来、国家的な行事として行われてきた歴史があり、日本の祭のなかでも、数少ない王朝風俗の伝統が残されている。
葵の花を飾った平安後期の装束での行列が有名。斎王代が主役と思われがちだが祭りの主役は勅使代である。源氏物語中、光源氏が勅使を勤める場面が印象的である。大気の不安定な時期に行われ、にわか雨に濡れることが多い。
葵祭は賀茂御祖神社と賀茂別雷神社の例祭で、古くは賀茂祭、または北の祭りとも称し、平安中期の貴族の間では、単に「祭り」と言えば葵祭のことをさしていた。賀茂祭が葵祭と呼ばれるようになったのは、江戸時代の 1694 年（元禄 7）に祭が再興されてのち、当日の内裏宸殿の御簾をはじめ、牛車（御所車）、勅使、供奉者の衣冠、牛馬にいたるまで、すべて葵の葉で飾るようになって、この名があるとされる。
もともと古代より、賀茂神社の神紋として使っていた二葉葵(別名、賀茂葵)が更なる由来である。著名な徳川家の三つ葉葵の原型とも言われ、徳川家康の先祖である松平信光が賀茂朝臣を称していた事や、松平氏の出身地が三河賀茂郡松平郷でもある事から、『「三つ葉葵」も葵祭で有名な京都の賀茂神社との関連の深い』と述べる研究者も居る。実際に徳川家も葵祭を重視しており、徳川家茂は孝明天皇につき従って共に 1863 年に葵祭に参列している。。
祭の起源と沿革は、欽明天皇の 567 年、国内は風雨がはげしく五穀が実らなかったので、当時賀茂の大神の崇敬者であった伊吉の若日子に占わせたところ、賀茂の神々の崇りであるというので、若日子は勅命をおおせつかって、4 月の吉日に祭礼を行い、馬には鈴をかけ、人は猪頭（ししがしら）をかぶって駆競（かけくらべ）をしたところ、風雨はおさまり、五穀は豊かに実って国民も安泰になったという。819 年（弘仁 10）には、朝廷の律令制度として、最も重要な恒例祭祀（中紀）に準じて行うという国家的行事になった。
源氏物語にも、葵祭の斎王列を見物しようと、光源氏の妻、葵の上と六条御息所が、車争いを演じた場面が登場する。 それから 10 年以上経ち、光源氏と紫の上が桟敷席から祭り見物する場面がある。ちなみに、紫の上は幼い頃。光源氏が勅使の役目を終えて休暇を迎えた際に、牛車の中で祭りを一緒に見物していた。

旧近衛邸

京都御所の北側、今出川門付近に、五摂家のひとつである近衛邸があった。現在では、屋敷など建造物は残

っていないが、庭園の一部が残り、近衛池脇に、しだれ桜で有名な近衛桜が植わっている。幕末期には、近衛忠熙（このえただひろ）が将軍継承問題で一橋派に属したため安政の大獄で失脚。その後、公武合体派として活動。薩摩藩とつながりが深い。篤姫は、島津斉彬の養女となったあと、近衛忠熙の養女となった後１３代将軍徳川家定に嫁いだ。

蛤御門

御苑の周りには、かつての公家町と市中の境界であった九つの御門があります。この蛤御門は、もとは新在家御門と呼ばれ常に閉ざされていましたが、江戸時代の大火で初めて開門されたことから「焼けて口開く蛤」にたとえられ「蛤御門」と呼ばれるようになりました。 また、幕末の禁門の変では、御苑一帯が主戦場となり、この戦いに長州藩が敗れたことで幕末動乱の転機となりましたが、その最大の激戦地だったのが蛤御門で、弾傷らしき跡が残っています。

二条城

徳川幕府における京都の拠点となった二条城は、徳川家康が慶長 8 年（1603 年）に京の宿館として建設した平城。家康と豊臣秀頼との会見場所となったほか、幕末の慶応 3 年（1867 年）には 15 代将軍慶喜がここで大政奉還を行った。

二条陣屋

二條陣屋は京都、二条城の城下にあって、江戸時代後期の豪商の屋敷として趣向を凝らした意匠と客の安全を図るための防衛建築が見られます。
代々小川家の住宅であり，現住民家では全国で２番目に国の重要文化財に指定されています。
その意匠は機智に富み、防衛建築は実に巧妙で、一見の価値があります。

神泉苑

「弘仁 3 年(812)、嵯峨天皇が神泉苑に行幸されて、花の樹をご覧になられた。 文人に詩を作らせ、綿を賜った。花宴の節がこれより始まった。」（日本後紀）
奈良時代以前は梅の花見が主流でしたが、 嵯峨天皇が神泉苑で日本最初の桜の花見の行事をされて以降、一般にも桜が広まったとされています。 嵯峨天皇は、優れた漢詩の作者でもあり、「凌雲集」や「経国集」に、 花宴の節や、重陽の節(9/9)で神泉苑にて詠まれた詩が収められています。

新選組壬生屯所旧跡

八木家は壬生村きっての旧家でかつて壬生郷士（壬生住人士）の長老をつとめていた。また幕末には新選組の近藤勇、土方歳三らの宿所となり旧壬生屯所として知られている。
建物は長屋門が東に開きその奥に主屋が南面して建つ。当家に残る普請願から長屋門が文化元年（1804 年）主屋は文化六年の造営と知られる。主屋は西端に土間を奥まで通し、土間に沿って居室を三室ずつ二列に配する。入口は土間部分に開くほか東南隅に式台を備えた本玄関を配しての北に仏間奥座敷を一列に並べて格式ある構成をとっている。長屋門の外観は腰に下見板を張り与力窓や出格子窓を開くなど昔のおもかげをよく残している。
壬生地区は今日市街化が著しいが、かつては洛中に近接した農村であり、当家は幕末期の遺構として、また新選組ゆかりの建築として貴重であり、昭和 58 年 6 月 1 日京都市指定有形文化財に指定された。

壬生寺

壬生寺は新選組ファンにとって、聖地のような寺です。かつて境内は新選組の兵法調練場とされ、今では局

長の近藤勇の像が建立されて、幾人もの新選組隊士の墓があります。
新選組といえば、見方によっては開明へ向かう時代の流れに逆行した時代錯誤の集団に過ぎないのに、なぜ今に至るも私たちの心をときめかせるのでしょうか。
名刀虎徹を携えて、鍛え抜いた豪剣を振るった近藤勇、新選組を鉄の規律によって風のように動く組織に育て上げた土方歳三、どんな鋭い攻撃も難なくかわして多くの敵を切った天才剣士沖田総司…。
滅びゆく徳川幕府に忠誠を誓って戦った彼らは、揺らぎない「誠」を貫いた男たちとして強い輝きを放ち、人を惹きつけて止みません。実際、彼らがどれほど強かったのか？　司馬遼太郎の『燃えよ剣』によれば、生き残った三番隊長、斉藤一はのちに警視庁に勤務する警視官（警察官）となりましたが、 剣術の練習の際、四段、五段の使い手たちが集団でかかっても小手ひとつ擦らせなかったといいますから、余程のものだったのでしょう。壬生寺は新選組のイメージが強いですが、実は平安時代前期から続く由緒あるお寺で、新選組関係の史料だけでなく、貴重な文化財を数多く蔵しています。歴史好きなら一度は訪れてみたい史跡です。

京都清宗根付館

江戸時代、印籠・煙草入れ・胴乱・巾着などの「提げ物」を携帯する際、 紛失や盗難を防ぐ必要から発明されたのが『根付』です。
当美術館では 4500 点を超えるコレクションの中から現代根付を中心に約 400 点を展示しております。江戸時代後期(文政 3 年）に建てられた京都市 指定有形文化財の武家屋敷「旧神先家住宅」の中で日本の伝統美『根付』を心ゆくまでご鑑賞下さい。

島原大門

島原大門（しまばらおおもん）は、京都の花街である島原の東入口にあたる大門で、京都市の登録有形文化財。高麗門形式である。島原は、寛永 17 年（1640 年）　または寛永 18 年（1641 年）に六条三筋町から移転した日本初の幕府公認の遊女街。当初は東側の大門のみであったが、享保 17 年（1732 年）に西門が設置された。大門は明和 3 年（1767 年）に現在地に付け替えられ、慶応 3 年(1867 年)に現在の門が建てられた。周囲を塀と堀で囲み、大門を一か所に設ける当初の構成は、江戸の吉原、大阪の新町と同様に、遊里を隔離し、遊女を疎外する目的で作られている。 大門外には、近世、遊郭を訪れる客に、顔を隠すための編み笠を貸した編み笠茶屋があった。また、大門口を入ったところには出口の茶屋という、客を待たせ、揚屋の門口まで送っていく施設もあった。八つ時（午後二時頃）に大門を開くことを八門（やつもん）と言った。

島原角屋

島原は、江戸時代以来公的に許された花街として発展した。花街は歌舞音曲を伴う遊宴の町であり、江戸吉原に代表される遊郭とは性格が異なる。
花街には「揚屋」と「置屋（おきや）」があった。揚屋に太夫（たゆう）や芸妓を派遣するのが置屋である。揚屋はかつて江戸の吉原や大阪の新町にもあったが、吉原は宝暦 7 年（1757）の大火で焼失。大阪は昭和 20 年の空襲で消滅してしまった。
ちなみに「揚屋」とは、大規模な宴会場のことをいう。江戸時代中ごろまでは間口が狭く奥行きのある小規模な建物で営業されていた。1 階に台所と居住部分、２階にメインとなる座敷があり、そこで客を２階へ揚げるところから「揚屋」と呼ばれるようになった。それが次第に店の規模が大きくなり、1 階にも大広間を設けるようになった。

角屋は、島原を代表する揚屋である。現在は営業していないが、大規模な建物は花街文化をいまに伝える貴重な建造物である。
入口を一歩潜ると江戸時代の雰囲気が一気に広がる。中戸口に掛かる角屋の家紋・三ツ蔓蔦（みつつるつた）を白く染め抜いた暖簾（のれん）が印象的である。2 本の古木は槐（えんじゅ）の木。原産地中国では古来不老長生や幸福招来の銘木として尊ばれてきた。淡い茶褐色の聚楽壁（じゅらくかべ）が揚屋の風格を一層高めている。
１階にある表座敷は「網代（あじろ）の間」という。広さは 28 畳もある。天井板が網代組なのでその名がつけられた。天井を支える竿縁（さおぶち）には、京都の銘木北山杉が皮つきのまま使われている。正面の床の間は幅２間（けん）。床柱は太い皮つき丸太。細部へのこだわりより、室内の雰囲気を見事に演出している。
こうした材料やデザインを見れば、角屋の主人がいかに粋人であったかが分かる。しかもここで遊ぶ客たちは、詩歌や俳句、歌舞音曲に通じた教養人が多く、安普請では彼らの目を楽しませることができない。
１階にはもう一部屋、「松の間」という大広間がある。襖や衝立の絵が素晴らしく、目近に拝観できるのがありがたい。衝立の「布袋の図」は、どの方角からも正面に見える不思議な絵である。
松の間の名称は、庭にある大きな臥龍松（がりょうしょう）に由来する。その松は、雲海を思わせる白砂の庭にうねるように伸びている。寛政 11 年（1799）に刊行された『都林泉名勝図会』には「角屋雪興（ゆきのうたげ）」の表題で、雪をかぶった臥龍松が紹介されている。口うるさい京童も感嘆した名松なのである。
島原という地名はいつ生まれたのだろうか。寛永 18 年（1641）、それまで六条三筋にあった花街がいまの地に移された。当時は辺鄙な一帯で西新屋敷と名付けられた。しかしそのときの移転騒動が、４年前の寛永 14 年（1637）に勃発した島原の乱を連想させたことから、島原と呼ばれるようになった。
島原にはいまも大門や見返り柳がそのまま残されている。太夫町、揚屋町（あげやちょう）などの町名はいまなお生きている。新選組の近藤勇や沖田総司（そうじ）らは、ときにこの界隈に足を運び、角屋に揚がり談論風発の日々を送ったのである。

西本願寺（にしほんがんじ）

京都市下京区にある仏教寺院。浄土真宗本願寺派の本山である。山号は龍谷山（りゅうこくざん）。
西本願寺は通称であり、正式名称は「龍谷山 本願寺」、宗教法人としての名称は「本願寺」である。京都市民からは「お西さん」の愛称でも親しまれている。真宗大谷派の本山である「東本願寺」（正式名称「真宗本廟」）と区別するため、両派の本山は通称で呼ばれることが多い。文永 7 年（1272 年）、親鸞の廟堂として京都東山の吉水の地に創建されたがその後比叡山延暦寺から迫害を受けるなど場所は転々とし、現在地には天正 19 年（1591 年）、豊臣秀吉の寄進により大坂天満から移転した。
境内は国の史跡に指定され、「古都京都の文化財」として世界遺産にも登録されている。
本願寺住職が浄土真宗本願寺派の門主となる。
境内には桃山文化を代表する建造物や庭園が数多く残されており、平成 6 年（1994 年）に国の史跡に指定され、同年 12 月にユネスコの文化遺産に「古都京都の文化財」として登録されている。
建物の配置と構造は東向きを原則とする真宗建築の典型で、親鸞聖人像が安置されている御影堂（ごえいどう）が、北隣の本堂（阿弥陀堂）よりも大きく造られている。これは本願寺がそもそも宗祖親鸞の廟堂として始まったためである。寛永 13 年（1636 年）に再建された御影堂は、「寛政の大修復」寛政 12 年（1800 年）及び「平成大修復」（1999 年 － 2008 年 12 月）と 2 回の大修復を経ている。
なお、西本願寺や東本願寺では「ごえいどう」と呼称するが、専修寺（真宗高田派）・知恩院（浄土宗）では「みえいどう」と呼称する。

唐門(国宝)境内の南側、北小路通に南面して建つ。境内東側の御影堂門、阿弥陀堂門がそれぞれの堂への入口であるのに対し、唐門は書院（対面所）への正門である。前後に計 4 本の控え柱をもつ四脚門形式で、屋根は檜皮葺き、正背面は唐破風造、側面は入母屋造の「向い唐門」である。総漆塗り、各部各所を中国の許由と張良の故事を題材とした極彩色彫刻と鍍金金具で装飾しており、日暮し眺めても飽きないとされることから「日暮門」の俗称がある。場所によっては厚さ 60 センチメートルにもなるこれら装飾彫刻の多くがのちに付加されたものであることが修理に際して明らかにされている。金具の各所には桐紋と菊紋が打たれ、寺院の門としては華麗に過ぎるところから聚楽第の遺構とも伏見城の遺構ともあるいは元和 2 年以降破壊が進んだ豊国神社から移築されたものとも伝えるが確証はない。ただ様式から言えば天正銘が発見された大徳寺唐門に比べて明らかに後の時代に属するものと考えられ、その創建は慶長期以降と推定されるから聚楽遺構説は否定される。寺の記録『元和四戊午年御堂其外所々御再興ノ記』によれば、元和 3 年（1617 年）の寺の火災の翌年に旧御影堂門（一説には阿弥陀堂門）を「御対面処ノ東」に移築したとあるから元和 3 年以前に本願寺にあったことが確認でき、のちに寛永初期、御影堂再建に先立つ一連の境内整備の際に現在地に再移築したと考えられているが、そもそもこの門が最初に本願寺に現れた年代や事情ははっきりしていない。